Asian Party

アジアンパーティは、「アジアと創る」をコンセプトに、アジアの人、モノ、情報が集う社交場をイメージしています。

主要事業である「The Creators」、「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「福岡アジア文化賞」の三つを柱に、民間企業・団体等と連携した様々なイベントを開催し、全18事業で約44万人に参加いただきました。

アジアンパーティPRポスター

The Creators　2018.9.22 Sat－23 Sun

アジアフォーカス・福岡国際映画祭　2018.9.14 Fri－23 Sun

発行／福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620 福岡市中央区天神1－8－1　福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930　FAX 092-735-4130
Email:acprize@gol.com　http://fukuoka-prize.org/

第29回 福岡アジア文化賞
FUKUOKA PRIZE 2018

大賞
賈 樟 柯（ジャ・ジャンクー）
JIA Zhangke
映画監督／中国

学術研究賞
末廣 昭
SUEHIRO Akira
経済学者、地域研究者（タイ）／日本

芸術・文化賞
ティージャン・バーイー
Teejan Bai
パンダワーニー奏者／インド

報告書

主催　福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団
後援　外務省、文化庁

Asian Party

福岡アジア文化賞の受賞者

= 創設特別賞　= 大賞　= 学術研究賞　= 芸術・文化賞

パキスタン
- 第7回 ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン（カッワーリー歌手）
- 第17回 アクシ・ムフティ（民俗文化保存専門家）
- 第27回 ヤスミーン・ラリ（建築家・人道支援活動家）

ネパール
- 第15回 ラーム・ダヤル・ラケーシュ（民俗文化研究者）

インド
- 第2回 ラヴィ・シャンカール（音楽家・シタール奏者）
- 第5回 パドマー・スブラマニヤム（舞踊家）
- 第8回 ロミラ・ターパル（歴史学者）
- 第15回 アムジャッド・アリ・カーン（サロード奏者）
- 第18回 アシシュ・ナンディ（社会・文明評論家）
- 第20回 パルタ・チャタジー（政治学・歴史学者）
- 第23回 ヴァンダナ・シヴァ（環境哲学者）
- 第24回 ナリニ・マラニ（アーティスト）
- 第26回 ラーマチャンドラ・グハ（歴史学・社会学者）
- 第27回 A.R.ラフマーン（作曲家・作詞家・歌手）
- 第29回 ティージャン・バーイー（バンダワーニー奏者）

第29回芸術・文化賞受賞者
ティージャン・バーイー

アジア以外の国・地域

英国
- 第1回 ジョゼフ・ニーダム（中国科学史研究者）
- 第28回 クリス・ベーカー（歴史学者）

アイルランド
- 第11回 ベネディクト・アンダーソン（政治学者）

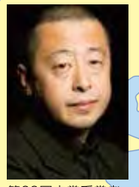
オーストラリア
- 第5回 王 賡 武（歴史学者）
- 第13回 アンソニー・リード（歴史学者）
- 第24回 テッサ・モーリス＝スズキ（アジア地域研究者）

フランス
- 第20回 オギュスタン・ベルク（文化地理学者）

ドイツ
- 第22回 ニールズ・グッチョウ（建築史家・修復建築家）

米国
- 第2回 ドナルド・キーン（日本文学・文化研究者）
- 第3回 クリフォード・ギアツ（文化人類学者）
- 第6回 ナム・ジュン・パイク（ビデオアーティスト）
- 第9回 スタンレー・J・タンバイア（人類学者）
- 第21回 ジェームズ・C・スコット（政治学者・人類学者）
- 第25回 エズラ・F・ヴォーゲル（社会学者）

中国
- 第1回 巴 金（作家）
- 第4回 費 孝 通（社会学・人類学者）
- 第7回 王 仲 殊（考古学者）
- 第13回 張 芸 謀（映画監督）
- 第14回 徐 冰（アーティスト）
- 第15回 厲 以 寧（経済学者）
- 第17回 莫 言（作家）
- 第20回 蔡 國 強（現代美術家）
- 第28回 王 名（行政学者、NGO・市民社会研究者）
- 第29回 賈 樟 柯（映画監督）


第29回大賞受賞者
賈 樟 柯

モンゴル
- 第4回 ナムジリン・ノロゥバンザト（声楽家）
- 第17回 シャグダリン・ビラ（歴史学者）

ブータン
- 第16回 タシ・ノルブ（伝統音楽家）

ミャンマー
- 第11回 タン・トゥン（歴史学者）
- 第16回 トー・カウン（図書館学者）
- 第26回 タン・ミン・ウー（歴史学者）

スリランカ
- 第13回 キングスレー・M・デ・シルワ（歴史学者）
- 第15回 ローランド・シルワ（文化遺産保存建築家）
- 第19回 サヴィトリ・グナセーカラ（法学者）

バングラデシュ
- 第12回 ムハマド・ユヌス（経済学者）
- 第19回 フォリダ・パルビーン（音楽家）

タイ
- 第1回 ククリット・プラモート（作家・政治家）
- 第5回 スパトラディット・ディッサクン（考古学・美術史学者）
- 第10回 ニティ・イヨウシーウォン（歴史学者）
- 第12回 タワン・ダッチャニー（画家）
- 第18回 シーサック・ワンリポードム（人類学・考古学者）
- 第23回 チャーンウィット・カセートシリ（歴史学者）
- 第24回 アピチャッポン・ウィーラセタクン（映画作家・アーティスト）
- 第28回 パースック・ポンパイチット（経済学者）

インドネシア
- 第2回 タウフィック・アブドゥラ（歴史学者・社会科学者）
- 第6回 クンチャラニングラット（文化人類学者）
- 第9回 R.M.スダルソノ（舞踊家・舞踊研究者）
- 第11回 プラムディヤ・アナンタ・トゥール（作家）
- 第23回 クス・ムルティア・パク・ブウォノ（宮廷舞踊家）
- 第25回 アジュマルディ・アズラ（歴史学者）

★福岡

香港
- 第19回 アン・ホイ（映画監督）
- 第25回 ダニー・ユン（文化クリエイター）

台湾
- 第10回 侯 孝 賢（映画監督）
- 第18回 朱 銘（彫刻家）

ラオス
- 第16回 ドアンドゥアン・ブンニャウォン（織物研究家）

ベトナム
- 第7回 ファン・フイ・レ（歴史学者）
- 第26回 ミン・ハン（ファッションデザイナー）

カンボジア
- 第8回 チェン・ポン（劇作家・芸術家）
- 第22回 アン・チュリアン（民族学者・クメール研究者）
- 第28回 コン・ナイ（吟遊詩人、チャパイ・マスター）

フィリピン
- 第3回 レアンドロ・V・ロクシン（建築家）
- 第12回 マリルー・ディアス＝アバヤ（映画監督）
- 第14回 レイナルド・C・イレート（歴史学者）
- 第23回 キドラット・タヒミック（映画作家）
- 第27回 アンベス・R・オカンポ（歴史学者）

マレーシア
- 第4回 ウンク・A・アジズ（経済学者）
- 第11回 ハムザ・アワン・アマット（影絵人形遣い）
- 第13回 ラット（マンガ家）
- 第19回 シャムスル・アムリ・バハルディーン（社会人類学者）

シンガポール
- 第10回 タン・ダウ（ビジュアルアーティスト）
- 第14回 ディック・リー（シンガーソングライター）
- 第21回 オン・ケンセン（舞台芸術家）

日本
- 第1回 黒澤 明（映画監督）
- 第1回 矢野 暢（社会科学者）
- 第2回 中根 千枝（社会人類学者）
- 第3回 竹内 實（中国研究者）
- 第4回 川喜田 二郎（民族地理学者）
- 第5回 石井 米雄（東南アジア研究者）
- 第6回 辛島 昇（歴史学者）
- 第7回 衞藤 瀋吉（国際関係研究者）
- 第8回 樋口 隆康（考古学者）
- 第9回 上田 正昭（歴史学者）
- 第10回 大林 太良（民族学者）
- 第12回 速水 佑次郎（経済学者）
- 第14回 外間 守善（沖縄学者）
- 第17回 濱下 武志（歴史学者）
- 第20回 三木 稔（作曲家）
- 第21回 毛里 和子（現代中国研究者）
- 第24回 中村 哲（医師）
- 第29回 末廣 昭（経済学者・地域研究者［タイ］）

韓国
- 第3回 金 元 龍（考古学者）
- 第6回 韓 基 彦（教育学者）
- 第8回 林 権 澤（映画監督）
- 第9回 李 基 文（言語学者）
- 第16回 任 東 権（民俗学者）
- 第18回 金 德 洙（伝統芸能家）
- 第21回 黄 秉 冀（音楽家）
- 第22回 趙 東 一（文学者）

第29回学術研究賞受賞者
末廣 昭

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 …… 1・2
福岡アジア文化賞とは …… 3・4
第29回受賞者
- 大賞　賈 樟 柯（ジャ・ジャンクー） …… 5
- 学術研究賞　末廣 昭 …… 6
- 芸術・文化賞　ティージャン・バーイー …… 7

授賞式 …… 8～12
市民交流事業
- 賈 樟 柯（ジャ・ジャンクー） …… 13
- 末廣 昭 …… 14
- ティージャン・バーイー …… 15

受賞者記者会見および広報活動など …… 16
共催事業、協力事業 …… 17
歴代受賞者名鑑 …… 18～22

福岡アジア文化賞とは

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバリゼーション時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

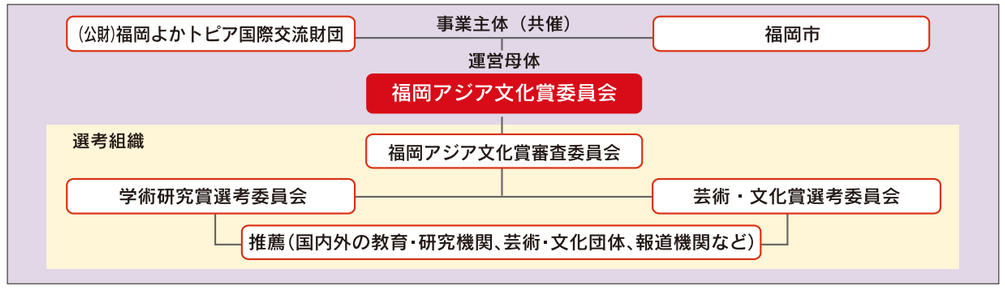
大　賞	学術研究賞	芸術・文化賞
賞金　¥5,000,000	賞金　¥3,000,000	賞金　¥3,000,000
アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体を対象としています。	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

3. 対象圏域

東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催

福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団※



※福岡よかトピア国際交流財団：アジア太平洋博覧会-福岡’89の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

第29回福岡アジア文化賞のあゆみ

2017.07	48か国・地域約7,000人に第29回、30回受賞賞候補者の推薦を依頼
2018.01～02	芸術・文化賞（1月29日）、学術研究賞（2月18日）各選考委員会にて、推薦された27か国・地域の受賞候補者167名4団体について選考
2018.02	審査委員会（28日）にて審査
2018.04	審査・選考合同委員会（22日）
2018.05	文化賞委員会（30日）にて3人の受賞者を承認
2018.09	記者会見及び授賞式（20日）、学校訪問（21日）、市民フォーラム（19日、22日）

福岡アジア文化賞委員会委員

2018年10月現在　五十音順、敬称略

特別顧問	宮田　亮平	文化庁長官
〃	宮川　学	外務省国際文化交流審議官
〃	小川　洋	福岡県知事
名誉会長	髙島　宗一郎	福岡市長
会　長	藤永　憲一	（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長
副会長	久保　千春	九州大学総長
〃	川上　晋平	福岡市議会議長
〃	貞刈　厚仁	福岡市副市長
監　事	谷川　浩道	福岡市社会福祉協議会会長
〃	水町　博之	福岡市会計管理者
委　員	石田　正明	福岡市議会副議長
〃	岩松　城	毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長
〃	歌川　信郎	日本放送協会福岡放送局長
〃	江口　勝	福岡県副知事
〃	唐池　恒二	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長
〃	川崎　隆生	西日本新聞社取締役会長
〃	久保田　勇夫	株式会社西日本シティ銀行取締役会長
〃	桑田　一郎	日本経済新聞社専務執行役員西部支社代表
委　員	榊　泰輔	九州産業大学学長
〃	佐藤　尚文	株式会社九電工取締役会長
〃	佐藤　靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	塩田　康一	九州経済産業局長
〃	柴戸　隆成	株式会社福岡銀行取締役頭取
〃	下野　元也	九州運輸局長
〃	竹島　和幸	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	多田　昭重	福岡文化連盟会長
〃	田中　優次	西部ガス株式会社代表取締役会長
〃	田村　やよひ	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	中井　一平	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	橋本　仁	朝日新聞社執行役員西部本社代表
〃	古川　清文	福岡市議会第1委員会委員長
〃	星子　明夫	福岡市教育委員会教育長
〃	薬真寺　偉臣	九州電力株式会社代表取締役副社長執行役員
〃	山口　政俊	福岡大学学長
〃	K.J.シャフナー	西南学院大学学長

第29回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委員長／久保 千春
九州大学総長
福岡アジア文化賞委員会副会長

副委員長／貞刈 厚仁
福岡市副市長
福岡アジア文化賞委員会副会長

委　員／石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭プログラミング・ディレクター
芸術・文化賞選考委員会委員長

委　員／後小路 雅弘
九州大学大学院人文科学研究院教授
芸術・文化賞選考委員会副委員長

委　員／清水 展
関西大学特任教授、京都大学名誉教授
学術研究賞選考委員会委員長

委　員／竹中 千春
立教大学法学部教授
学術研究賞選考委員会副委員長

委　員／柄 博子
国際交流基金理事

委　員／土屋 直知
株式会社正興電機製作所
代表取締役会長

福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委員長／清水 展
関西大学特任教授
京都大学名誉教授

副委員長／竹中 千春
立教大学法学部教授

委　員／天児 慧
早稲田大学名誉教授

委　員／木宮 正史
東京大学大学院
総合文化研究科教授

委　員／河野 俊行
九州大学大学院法学研究院教授

委　員／清水 一史
九州大学大学院
経済学研究院教授

委　員／新田 栄治
鹿児島大学名誉教授

委　員／脇村 孝平
大阪市立大学大学院
経済学研究科教授

福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委員長／石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭
プログラミング・ディレクター

副委員長／後小路 雅弘
九州大学大学院
人文科学研究院教授

委　員／内野 儀
学習院女子大学
日本文化学科教授

委　員／宇戸 清治
東京外国語大学名誉教授

委　員／小西 正捷
立教大学名誉教授

委　員／寺内 直子
神戸大学大学院
国際文化学研究科教授

委　員／西村 幸夫
神戸芸術工科大学教授

委　員／松隈 浩之
九州大学
芸術工学研究院准教授

2018年10月現在　五十音順、敬称略

第29回 大賞 受賞者

賈 樟 柯（ジャ・ジャンクー） *JIA Zhangke*

中国／映画

主な経歴

1970　中国、山西省汾陽（フェンヤン）生まれ
1997　北京電影学院卒業　卒業制作として「一瞬の夢」を監督
1998　『一瞬の夢』がベルリン国際映画祭フォーラム部門でワールドプレミア上映
2000　『プラットホーム』がヴェネチア国際映画祭コンペティション部門に選出
2006　古都・奉節（フォンジェ）を舞台にした『長江哀歌』、三峡地区で撮影したドキュメンタリー映画『東』がヴェネチア国際映画祭に選出（『長江哀歌』はコンペティション部門、『東』はオリゾンティ部門）
2007　世界経済フォーラムヤング・グローバル・リーダーズ選出
カンヌ国際映画祭シネフォンダシオン部門、短編映画部門審査委員長
2010　若い映画監督に資金を提供する「Wing Project」開始
2011　ヴェネチア国際映画祭オリゾンティ部門審査委員長
2013　米国フォーリン・ポリシー誌「世界の頭脳100」選出
2014　カンヌ国際映画祭コンペティション部門審査委員
2016　サンセバスチャン映画祭審査委員
米国映画芸術科学アカデミー会員選出
オンライン短編映画プラットフォーム「柯首映[Jia Screen]」立ち上げ
2017　山西省で平遥（ピンヤオ）クラウチング・タイガー・ヒドゥン・ドラゴン国際映画祭創設

主な受賞歴

1996　香港インディペンデント短編映画ビデオ賞金賞（『小山の帰郷』）
※中編ビデオ作品
1998　ベルリン国際映画祭ヴォルフガング・シュタウテ賞（最優秀新人監督賞）、NETPAC賞（最優秀アジア映画賞）、ナント三大陸映画祭グランプリ（金の気球賞）、ベルギー王立映画アカデミー ラージュ・ドール賞、プサン国際映画祭ニュー・カレント賞、バンクーバー国際映画祭ドラゴン&タイガー賞（『一瞬の夢』）
2000　ヴェネチア国際映画祭NETPAC賞（最優秀アジア映画賞）、ナント三大陸映画祭グランプリ（金の気球賞）・ナント市賞（最優秀監督賞）（『プラットホーム』）
2001　フリブルク映画祭国際批評家連盟賞、国際シネクラブ連盟ドン・キホーテ賞、シンガポール映画祭ヤングシネマ賞、ブエノスアイレス国際映画祭グランプリ（『プラットホーム』）
2002　マルセイユ国際ドキュメンタリー映画際グランプリ（『In Public』）
2003　シンガポール映画祭国際批評家連盟賞特別賞（「青の稲妻』）
2006　ヴェネチア国際映画祭グランプリ（金獅子賞）（『長江哀歌』）
2007　アジアン・フィルム・アワード最優秀監督賞（『長江哀歌』）、台湾ドキュメンタリー映画祭最優秀アジア・ドキュメンタリー賞（『東』）、ヴェネチア国際映画祭最優秀ドキュメンタリー賞（『無用』）
2008　キネマ旬報ベスト・テン外国映画第1位・監督賞、毎日映画コンクール外国映画第1位、ロサンゼルス映画批評家協会賞外国語作品賞、朝日ベストテン映画祭洋画第1位（『長江哀歌』）、南からの映画祭（ノルウェー）、国際映画批評家連盟賞（『四川のうた』）
2009　フランス芸術文化勲章オフィシエ章
2010　ロカルノ国際映画祭名誉金豹賞、プリンス・クラウス基金プリンス・クラウス・アワード
2013　カンヌ国際映画祭脚本賞、トロント映画批評家協会賞最優秀外国語映画賞、フランス映画批評家協会賞最優秀外国映画賞、アブダビ映画祭最優秀作品賞（『罪の手ざわり』）
2015　サンセバスチャン国際映画祭観客賞（ヨーロッパ映画）、台湾金馬奨オリジナル脚本賞・観客賞（『山河ノスタルジア』）、カンヌ国際映画祭フランス映画協会より黄金の馬車賞
2016　アジアン・フィルム・アワード最優秀脚本賞、サンディエゴ映画批評家協会賞外国語映画賞（『山河ノスタルジア』）

贈賞理由

賈樟柯氏は、21世紀の中国を代表する映画監督である。故郷の山西省をはじめとする地方の都市を舞台に据え、急激な経済発展がもたらした社会的歪みの中で苦悩しながらもしたたかに生きる市井の人々、とりわけ若者たちが抱える閉塞感や希望を等身大に描いた数々の作品で世界的に高く評価されている。

1970年、山西省・汾陽（フェンヤン）に生まれた賈氏は、高校時代から小説を書いたり油絵を描くことが好きだったが、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『黄色い大地』（1984年）を観て衝撃を受け、映画監督を志す。1993年に北京電影学院に入学すると在学中から頭角をあらわし、スリで生計を立てる汾陽の若者を描いた卒業制作『一瞬の夢』（1997年）を監督。本作は学生作品にもかかわらずベルリン国際映画祭フォーラム部門に入選し、最優秀新人監督賞と最優秀アジア映画賞をダブル受賞した。

続く第2作『プラットホーム』（2000年）では文化大革命終了後の1980年代を背景に、巡回劇団に所属する男女4人の青春を描き、ヴェネチア国際映画祭コンペティションに入選し、ナント三大陸映画祭でグランプリ（金の気球賞）に輝いた。また本作から日本のオフィス北野との提携が始まり、以後は国際的なネットワークのなかで製作する態勢が確立されていく。

その後も『青の稲妻』（2002年）では北京オリンピック開催決定に沸く周囲をよそ目に銀行強盗を企てる失業中の青年、『世界』（2004年）では将来に不安を抱きながら北京郊外のテーマパークで働く男女に焦点を当て、前者はカンヌ国際映画祭、後者はヴェネチア国際映画祭に入選を果たす。そして2006年、三峡ダムに水没する古都・奉節（フォンジェ）にやってきた男女のふれあいを主筋に、幻想的でSF的な場面も挿入し、運命に翻弄されながら生きていく人々を描いた『長江哀歌（エレジー）』がヴェネチア国際映画祭のグランプリ（金獅子賞）に輝き、氏の名声は世界的に不動のものとなった。

賈氏の作品は、故郷の山西省をはじめとする地方の都市を舞台に据え、自由でチャレンジングな映像話法を駆使しながら、急激な社会変動の中をしたたかに生き抜いていく人々の姿を情感豊かにうたい上げる点が大きな特徴である。それは現実に起こった犯罪を基にした『罪の手ざわり』（2013年）、過去・現在・未来の3つのエピソードをつなぎ、ある母と子の人生にグローバル化する中国と世界の関係の変容を重ねた『山河ノスタルジア』（2015年）といった近作群で、ますます研ぎ澄まされている。また氏は2017年から山西省・平遥（ピンヤオ）で国際映画祭を主宰し、若手が作品を発表する場を創設するなど、次世代の育成にも尽力している。

このように賈樟柯氏は、激動の時代に翻弄されながらもしたたかに生きようとする人々の姿を情感豊かに描き出し、中国のみならず世界的に高く評価されている。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。

第29回 学術研究賞 受賞者

末廣 昭 *SUEHIRO Akira*

日本／経済学、地域研究（タイ）

主な経歴

1951　鳥取県米子市生まれ
1974　東京大学経済学部卒業（経済学学士）
1976　東京大学大学院経済学研究科応用経済学修士課程修了（経済学修士）
1976 - 87　特殊法人アジア経済研究所調査研究部研究員
1981 - 83　タイ、チュラロンコーン大学客員研究員
1987 - 92　大阪市立大学経済研究所助教授
1991　東京大学大学院経済学研究科博士号取得（博士・経済学）
1992 - 95　東京大学社会科学研究所助教授
1992 - 2005　アジア政経学会常任理事（2003-05年は理事長）
1993 - 98　日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所開発スクール（イデアス）客員教授
1994 - 95　ドイツ、ベルリン自由大学客員教授
1995 - 2016　東京大学社会科学研究所教授（2009-12年は所長）
1998 -　みずほアジア人材育成基金運営委員（2010年より委員長）
1999 -　日本タイ学会理事（2008-11年は会長）
2001 -　大平正芳記念財団運営・選定委員会委員（2016年より委員長）
2012　メキシコ、エルコレヒオデメヒコ大学院大学客員教授（5-6月）
2012 - 13　フランス、Collegium de Lyon（リヨン先端科学研究院）客員研究員（9-2月）
2016 -　学習院大学国際社会科学部教授、初代学部長（2018年まで）
東京大学名誉教授
日本貿易振興機構アジア経済研究所名誉研究員

主な受賞歴

1985　第6回発展途上国研究奨励賞（「タイ系企業集団の資本蓄積構造－製造業グループを中心として」（『アジア経済』25巻10号））
1990　第6回大平正芳記念賞、第33回日経経済図書文化賞（*Capital Accumulation in Thailand 1855-1985*）
2001　第13回アジア・太平洋賞大賞（『キャッチアップ型工業化論－アジア経済の軌跡と展望』）
2005　第20回大同生命地域研究奨励賞（「東南アジア、特にタイを中心とする経済研究および地域研究」に対して）
2007　第2回樫山純三賞（『ファミリービジネス論－後発工業化の担い手』）
第1回Family Business Award 学術優秀賞（星野妙子氏と共同）（『ファミリービジネスのトップマネジメント－アジアとラテンアメリカにおける企業経営』）
2010　紫綬褒章（「東南アジア地域研究」の功績により）

主な著作

Capital Accumulation in Thailand 1855-1985, ユネスコ東アジア文化研究センター,1989.
『タイ－開発と民主主義』岩波新書,1993.
『キャッチアップ型工業化論－アジア経済の軌跡と展望』名古屋大学出版会,2000.
『タイの経済政策－制度・組織・アクター』（共編著）日本貿易振興機構アジア経済研究所,2000.
『ファミリービジネスのトップマネジメント－アジアとラテンアメリカにおける企業経営』（共編著）岩波書店,2006.
『ファミリービジネス論－後発工業化の担い手』名古屋大学出版会,2006.
Catch-up Industrialization: The Trajectory and Prospects of East Asian Economies, シンガポール国立大学出版会,2008.
『タイ－中進国の模索』岩波新書,2009.
『東アジア福祉システムの展望－7カ国・地域の企業福祉と社会保障制度』（編著）ミネルヴァ書房,2010.
The Oxford Handbook of Business Groups（共著）, オックスフォード大学出版局,2010.
『新興アジア経済論－キャッチアップを超えて』岩波書店,2014.
『東アジアの社会大変動－人口センサスが語る世界』（共編著）名古屋大学出版会,2017.

贈賞理由

末廣昭氏は、日本におけるアジア経済研究の第一人者である。氏の学問的業績は、タイを中心とする徹底した現地調査に基づいた、類を見ない重厚なアジア研究である。タイ経済研究を基盤として、アジア全体の工業化や経済実態を解明し、アジア研究に多大な貢献をなした。

末廣氏は、1951年鳥取県米子市に生まれ、1974年に東京大学経済学部を卒業、1976年に東京大学大学院経済学研究科応用経済学修士課程を修了した。その後、1976年からアジア経済研究所調査研究部、1987年から大阪市立大学経済研究所（助教授）、1992年から東京大学社会科学研究所（助教授、教授、所長）、2016年からは学習院大学国際社会科学部（教授・初代学部長）において、アジア経済論等の研究と教育を担当してきた。

初期の代表作である *Capital Accumulation in Thailand 1855-1985*（1989年）は、長期におけるタイの資本蓄積を多くの文献と現地調査によって実証的に明らかにし、国際的に高く評価された。それ以後、現代タイの政治経済に関して、『タイ－開発と民主主義』（1993年）、『ファミリービジネス論－後発工業化の担い手』（2006年）、『タイ－中進国の模索』（2009年）等の数多くの著作・論文を発信してきた。

そして『キャッチアップ型工業化論－アジア経済の軌跡と展望』（2000年）が、タイだけではなくアジア全体の工業化と経済発展の研究における新たな視角を示して、多大な貢献をなした。本書は、タイの事例を導きの糸として、工業化の担い手、イデオロギー、制度・組織に焦点をあてアジアの工業化と経済発展を捉えた、日本の代表的なアジア経済論である。その後、アジア経済の変化に対応して『新興アジア経済論－キャッチアップを超えて』（2014年）等もまとめている。

近年では、中国と東南アジアの関係を含めた大メコン圏の研究、人口統計に基づくアジアの社会変動に関する斬新な研究を進めている。

末廣氏は研究者としての傑出した業績だけではなく、タイ研究、アジア研究の組織化や若手研究者の育成でも大きな貢献をなしてきた。学会ではアジア政経学会理事長、日本タイ学会会長などを歴任してアジア研究の発展に多大な役割を果たした。また東南アジアと日本の重要な懸け橋となるとともに、みずほアジア人材育成基金運営委員長、大平正芳記念財団運営・選定委員会委員長等を務め、アジアと日本の交流と相互理解に尽力してきた。そして日本とアジアにおける数多くのアジア研究の後進を育成したことも、多大な貢献である。

末廣昭氏は、このようにアジア研究の発展に大いに寄与し、その功績はまことに顕著であり、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。

ティージャン・バーイー *Teejan Bai*

インド／音楽

主な経歴

1956	インド、チャッティースガル州ドゥルガ県アターリー村（パータン）生まれ。ガニヤーリー村で育つ
1968	12歳で結婚（一度も夫の家を訪れることのないまま離婚） 母方の祖父からパンダワーニーの伝統を学び、後にウメイド・スィン・デシュムックからパンダワーニーの非公式の教えを請う
1969	隣村チャンドクリー村（ドゥルガ）にて初めて公の場でパフォーマンス。女性として初めてパンダワーニー形式で歌を披露。評判となりその後、数々の公演に招待される
1970	女性がパンダワーニーを歌っているという理由で集落から追放
1982	ボーパールの先住民民俗芸術委員主催公演 インディラ・ガンディー首相（当時）の前で歌を披露
1985 - 86	インド文化大使としてポーランドのインド祭りで公演、以後フランス、ドイツ、英国等世界各国で公演
1986 -	ビライ製鋼所勤務
2001 -	自身の楽団を設立。公演および後進の指導
2003	グル ガーシダース大学（ビラスプル）、ライプル大学、ジャバルプル大学から名誉文学博士号

主な受賞歴

1988 インド国勲章パドマ・シュリー章
1996 サンギート・ナータク・アカデミー賞
1998 デヴィ・アヒリャー賞
1999 イスリー賞
2003 Aditya Vikram Birla Kala Shikhar Sammaan 賞
インド国勲章パドマ・ブーシャン章
2008 チャンドラシェーカレンドラ・サラスヴァティー国家栄誉賞
2012 リムカ・ブック・オブ・レコーズ（インド版ギネスブック）の「2012今年の顔」として10人のインド人マエストロの一人に選出
2013 ラジオの第一勲章
アルバス・ヌディスィリー世界遺産賞
チャッティースガル名誉賞
2014 9人の女性の宝石賞
2015 H.L. ナーゲガウラー国民賞
2016 M.S. スッブラクシュミー（生誕百周年）賞国民賞

主な公演

2010 国際女性の日コンサート（インド）
2011 Teejan Bai: The Pandavani Festival（インド、パドダラ）
東中央鉄道女性福祉協会（ECRWWA）（インド、パトナー）
2015 Bharat Bhavan 創立33周年記念（インド、ボパール）
シャハージー・バーラヴ音楽祭（インド、コルカタ）
2016 ベンガルール・ポエトリー・フェスティバル（インド、ベンガルール）
2017 Meet the Masters Series: Teejan Bai（インド、ニューデリー）

その他、インド伝統音楽・文化青少年普及協会（SPIC MACAY）によるプログラム等公演多数。
フランス、スイス、ドイツ、英国、イタリア、マルタ、キプロス、トルコ、イエメン、バングラデシュ、モーリシャス等、海外公演多数。

贈賞理由

ティージャン・バーイー氏は、古代インドの叙事詩『マハーバーラタ』に基づく歌語りのパンダワーニーを現代に伝える第一人者である。先住民社会の出身であり女性であることで二重にインド社会から差別されつつも類まれな天賦の才と強い意志をもって歌い続け、その成功によって、女性たちや虐げられた人々に勇気と励ましを与えてきた。

『マハーバーラタ』は、紀元前1000年頃に北インド平原部でいとこ同士の王子たちが激しく戦った戦記である。その様子を歌語りにした演目は各地各様に流布するが、パンダワーニーは古式にこだわらず、地域語のチャッティースガリーを駆使して民衆の人気を集めた。

古来インドでは様々な説話・伝承が、吟唱者によって豊かに伝えられてきた。民衆に人気がある『ラーマーヤナ』と双璧をなす『マハーバーラタ』はそれ以上に分量も内容も豊富な古今東西最大の叙事詩であり、これに比肩するものはない。そのうちに含まれる挿話のただひとつをとってもその語りには数夜を要し、その背後の哲学を解するのも容易なことではない。

このような古代叙事詩は、その起源も紀元前に遡るとされ、内容も深遠で難解であるが、一方ではそれはより判りやすい音楽や舞踊の形に移され、さらには地域語での語りや即興的な掛け合いをも交えながら発展をとげていった。今に伝わる歌語りは、2000年余りも以前の姿をそのままに留めているわけではないが、かえってその単純化された歌語りや身振り等による表現は、時代や地域を超えて、民衆の心に深く沁み通る。中でも彼女の歌語りは、必ずしもヒンドゥーの教義や学問的裏付けもない、中部インドの奥地に住む先住民社会出身の女性の心からの訴えである。その絞り出すような声と、伴奏者らとかわす念を押すようなパンダワーニー独特の短いやり取りの面白さは他の追随を許さない。

ティージャン・バーイー氏は、大統領から授与されるパドマ・シュリー章、さらに高位のパドマ・ブーシャン章、また地元の大学からの名誉学位をはじめ、数々の賞を受け、外国からの公演依頼をうけている。しかし彼女はそれによって生き方を変えることもなく、ただ彼女の愛するパンダワーニーの楽曲に浸り、空いた時間には、地元の工場での仕事を続けていた。

しかし、彼女の半生は決して平坦なものではなかった。先史時代以来の採集狩猟を続けてきた先住民の社会はことに女性に厳しく、12歳で結婚を強いられた彼女が人前で大好きな歌を披露することに家族や社会はこぞって反対した。ついには粗末な小屋での一人暮らしを余儀なくされ、さらには数度の離婚と子供たちとの死別という経験もした。しかしパンダワーニーを演じる彼女の強い意志と生き方は、インド社会の女性たちに人生の指針となって、生きていく上での強い勇気を与えた。

このような彼女の生き方は、音楽芸術上の貢献にとどまらない。社会面にも及ぶその多方面にわたる功績は著しく、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

第29回福岡アジア文化賞
授賞式

■日時：9月20日（木）18：30～20：00　■会場：アクロス福岡 福岡シンフォニーホール

式　次　第

【第1部】受賞者紹介
主催者代表挨拶　福岡市長　髙島 宗一郎
お言葉　秋篠宮殿下
選考経過報告　福岡アジア文化賞審査委員会委員長　久保 千春
贈賞　福岡市長　髙島 宗一郎
（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長　藤永 憲一

【第2部】祝賀演奏　福岡大学附属若葉高等学校　津軽三味線部
受賞者挨拶とインタビュー
受賞者演奏　ティージャン・バーイー氏

第29回福岡アジア文化賞　授賞式

花束贈呈

映像による歴代受賞者の紹介で幕を開けた第29回福岡アジア文化賞授賞式。秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと、各国のご来賓、各界関係者、大勢の福岡市民が一堂に会し、式はスタートしました。

満席の観客が見守る中、受賞者がステージに登場すると会場は拍手喝采が巻き起こり、受賞を祝う温かい空気に包まれました。

最初に主催者を代表して髙島宗一郎福岡市長が登壇し、アジア文化賞の意義と100名を超える受賞者について紹介。文化の振興と相互理解及び平和への貢献という福岡アジア文化賞の精神が多くの人々に深く理解され、アジアへそして世界へと広がっていくことを祈念しました。

続いて秋篠宮殿下より受賞者へのお祝いのお言葉を賜りました。審査委員長の久保千春九州大学総長より選考経過が報告された後、受賞者へ贈賞。髙島市長と藤永憲一福岡よかトピア国際交流財団理事長より賞状とメダルが授与されました。福岡インターナショナルスクールの子どもたちからお祝いの花束が贈られると、受賞者の顔に笑みがあふれ、観客からも盛大な拍手が送られました。

第2部は、福岡大学附属若葉高等学校の津軽三味線部による『津軽じょんがら節』の力強い演奏で幕開け。受賞者による喜びのスピーチが行われた後に、事前に市民から寄せられた質問をもとにインタビューの場が設けられました。最後に、受賞者のティージャン・バーイー氏がパンダワーニーのパフォーマンスを披露。インドの大叙事詩『マハーバーラタ』に描かれている戦争シーンのクライマックスを歌語りで披露してくださいました。生演奏をバックに迫力あふれるパフォーマンスで、観客をパンダワーニーの世界へいざない、今まで以上に楽しく華やかな授賞式となりました。

髙島福岡市長による主催者代表あいさつ

久保九州大学総長による選考経過の報告

大賞の賈樟柯氏への贈賞

学術研究賞の末廣昭氏への贈賞

芸術・文化賞のティージャン・バーイー氏への贈賞

福岡大学附属若葉高等学校 津軽三味線部による祝賀演奏

ティージャン・バーイー氏によるパフォーマンス

子どもたちと言葉を交わす受賞者

祝賀会

授賞式のあとは、各国の来賓、各界関係者など多数の参加者による祝賀会を開催。藤永憲一福岡よかトピア国際交流財団理事長が「福岡アジア文化賞を通じて、今後もさらに交流を深めていきましょう」と挨拶。来賓を代表して、孫忠宝中華人民共和国駐福岡総領事館副総領事がお祝いの言葉を述べ、石田正明福岡市議会副議長による乾杯でスタート。

弦楽四重奏の美しい音色が響く中、3名の受賞者たちを囲んで、温かく和やかな祝賀会となりました。

藤永理事長による開会あいさつ

孫中華人民共和国駐福岡総領事館副総領事による来賓あいさつ

石田福岡市議会副議長による乾杯

秋篠宮殿下お言葉

本日、第29回福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、大賞を受賞される賈樟柯氏、学術研究賞を受賞される末廣昭氏、そして芸術・文化賞を受賞されるティージャン・バーイー氏に心からお祝いを申し上げます。

世界的にグローバル化が進展する近年、私たちはその利便性をさまざまな面で享受しております。しかし、その一方では、画一化、均一化された思考方法や生活様式が広まっていることも指摘されるようになり、それぞれの国や地域が有する固有の文化やその多様性の大切さに対する認識が高まってきております。そしてその下で新たな文化の創造も盛んに行われるようになりました。

私自身、東南アジアを中心にアジア諸国を訪れる機会がたびたびあり、多様な風土や自然環境が作り出し、長い期間に渡って育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗、芸術など、文化の深さや豊かさに関心を持つとともに、それらを保存し、継承していくことの大切さを強く感じております。

29回目を迎える福岡アジア文化賞は、古くからアジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化の創造、そしてアジアに関わる学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するものであり、大変意義深い賞であるといえましょう。

その意味において、本日受賞される3名の方々の優れた業績は、アジアのみならず広く世界に向けてその意義を示し、また社会全体でこれらを共有することによって、次の世代へと引き継ぐ人類の貴重な財産になることと考えます。

終わりに、受賞される皆様に改めて祝意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がいっそう促進されていくことを祈念し、私のあいさつといたします。

受賞者あいさつ

大 賞　賈 樟 柯（ジャ・ジャンクー）

映画監督とは世の中の出来事を伝える使者 これからも映画制作を続けていきたい

尊敬するご来賓の皆様、福岡アジア文化賞大賞の受賞は、私にとって大変光栄なことです。今年は私が長編映画デビュー作『一瞬の夢』を撮ってから、ちょうど20年になります。この度の栄誉は、私の過去20年における映画制作に対する励ましであるとともに、今後の仕事に対する激励であるとも思います。

私の幼年時代から始まり、中国社会は近代に入ってから最も激烈な変化を経験してきました。私は幸いにも映画の仕事に携わり、この変革の中に生きる個人の運命と、私たちが経験した困難なときを映画で描くことができました。映画監督とは人類の情報を伝える使者であると私は考えています。

文化は私たちがお互いを理解する助けとなり、芸術は私たちが人間性を保つための助けとなるものです。今このとき、福岡において私が得たものは栄誉だけではなく、それにも増して皆様の熱い期待にほかなりません。私はこれからも映画の制作を続けていきます。どうか私の新しい作品を待っていてください。皆様ありがとうございました。

撮影中の様子

Interview

質問：福岡の印象を教えてください。
賈氏：福岡がいかにアジアに近くアジアとの交流に力を入れているかということを感じました。
質問：今後、中国映画はどのようになっていくと思いますか。
賈氏：中国の映画産業は非常に発展を遂げていて、マーケット的には世界第2位になっています。昨年は約800本の映画が制作されました。今後は、数量とともにレベルも発展してほしいと期待しています。
質問：映画制作で一番大事にしていることを教えてください。
賈氏：人間を見つめ、人間をどうやって撮るかということに力点を置いています。これまでの作品もそうなんですが、とにかくフォーカスを人間にあて撮影してきました。これが私のスタイルなので、今後も変化する社会の中で、人間がどのような感情を持って生きているかというところを映画にきちんと撮っていきたいと思っています。

学術研究賞　末廣 昭

デジタル時代到来により日々変化するアジアを追求していきたい

秋篠宮同妃両殿下、福岡市長、福岡アジア文化賞関係者の皆様、そして何より福岡市民の皆様に心から感謝を申し上げます。

過去、素晴らしい芸術家、研究者の皆様がこの賞を受賞されました。その仲間に加えていただくことは、私にとってこの上なく光栄に存じます。

同時に日本政府ではなく、福岡市の国際的な賞に選ばれたことに、私は特別な思いを持たざるを得ません。私は鳥取県に生まれ、高校まで過ごした後、東京や大阪などで過ごしてきました。受賞の対象のひとつとなった本『キャッチアップ型工業化論』のあとがきの中で、私は「地方から日本を、地方の日本からアジア諸国を、生産現場から国民経済を。この3つを私のアジア研究の基本原則にしてきた」と書きました。その結果、キャッチアップ型工業化論という新しい視点が生まれてきたわけです。

かつて日本は、アジア諸国の工業化と社会の近代化の先頭を走っていました。その後、アジア諸国は、日本が経験した高齢化社会の到来という問題を経験するようになります。つまり日本とアジア諸国は、共通の問題に直面するようになりました。そして現在、日本は電子商取引やモバイル決済など、中国や他のアジア諸国から新しい技術や生活パターンを学ぶ立場にあります。日本とアジア諸国の関係は、日々変化し、そのことを十分に認識し、同時に変化するアジアを追求することを、この受賞を機会に引き続き課題にしていきたいと思います。本日は誠にありがとうございました。

Interview

質問：子どもの頃から研究者を目指していたのですか。
末廣氏：中学2年生のときに、蝶の生態を調べて100枚の論文を書いたので、研究者になる道はおそらく決まっていたかと思います。
質問：研究者生活の中で最もうれしかったことは何ですか。
末廣氏：1976年6月に初めてタイに行きました。タイの空港に夜中2時頃着いたのですが、私がお世話をした留学生20人くらいが待っていてくれて、トラックの荷台に乗ってバンコクに向かったことは一生忘れられません。
質問：若い人へのアドバイスやメッセージをお願いします。
末廣氏：ただインターネットの情報だけで世界を見るのではなく、相手の国へ行き、言葉を学び、食事をし、その中でつかんだものとインターネットで得た情報とをうまく組み合わせて、相手と付き合っていただきたいと思います。

芸術・文化賞　ティージャン・バーイー

教育に恵まれない子どもたちを支援しパンダワーニーを教えている

私に敬意を払ってくださった皆様、福岡市の皆様、年長者の方々及び若い方々にお礼を申し上げます。福岡に来てから、毎日嬉しくてドキドキして夜は眠ることができない程なのです。

現在、私は生活に恵まれない子どもたちの面倒を見ており、彼らにパンダワーニーを教えながら日々の生活を送っています。

私自身、教育には恵まれませんでしたので、現在は貧しい子どもたちをできる限り教育や生活の面で支えるようにしています。

今回の私の受賞のことを聞いて、子どもたちも大変喜んでくれました。

今回の受賞は私にとって自信になることは間違いありません。そして、ここでいただいた賞または経験などを活かしながら、私が教育の面で支えている子どもたちも、私と同じようにこの場に立つことができるように頑張っていきたいと思います。

皆様、今回は本当にありがとうございました。

パンダワーニーを教えるティージャン・バーイー氏

Interview

質問：これまでさまざまな問題があった中で、音楽を続けることができたモチベーションを教えてください。
ティージャン・バーイー氏：私の先生も、やはり私と同じように教育に恵まれなかった方でした。その先生が私に与えてくれた「勇気」です。それをもとに、ここまで伸びてきた、やってこられたと思っています。
質問：今回の受賞が今後の人生や芸術にどのような影響を与えると思いますか。
ティージャン・バーイー氏：福岡アジア文化賞を受賞したことは、私の人生の中で忘れられないことになると思います。もう本当に心の底から大変うれしく思っています。そのうれしさが今の涙に表れていると思います。

大賞

賈 樟 柯（ジャ・ジャンクー）

中国／映画　*JIA Zhangke*

市民フォーラム

賈樟柯の映画の原点
中国の“今”を撮る

■ 開催日／2018年9月19日（水）　18:30〜21:30　■ 参加者／260人
■ 会場／ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13

第1部 映画上映『山河ノスタルジア』

時代の流れに影響を受けている人たちの感情に焦点を当てた映画

ユナイテッド・シネマ キャナルシティ13で行われた市民フォーラム。大勢の市民が会場に詰めかけた中、賈樟柯氏の監督作品『山河ノスタルジア』を上映しました。この作品は、大きな変貌をとげる中国の故郷に一人残る母と、幼くして父に引き取られ、遠い異国で暮らす息子との親子の愛を描いた物語です。カンヌ国際映画コンペティション部門正式出品作品としても知られ、台湾・金馬奨オリジナル脚本賞・観客賞、アジアン・フィルム・アワード脚本賞等を受賞した本作。約2時間にわたり、時代に振り回され、離れながらも強い愛情で繋がる母と子の感動ストーリーを堪能しました。

第2部 パネルディスカッション

パネリスト
行定 勲
（映画監督）

パネリスト
市山 尚三
（映画プロデューサー）

コーディネーター
石坂 健治
（日本映画大学教授、東京国際映画祭アジア部門ディレクター）

「映画はその時代を記録する役割がある」

第2部は、映画監督の行定勲氏、賈氏の作品のプロデュースを務める映画プロデューサーの市山尚三氏、コーディネーターに石坂健治氏を迎えてディスカッションを行いました。

まずは、今回の受賞について、行定氏は「中国の“今”を描き、アジアをけん引してくれる監督が現れたなと思いました」と賈氏の栄誉を称えました。市山氏は「『一瞬の夢』という映画を見て、すごい監督が出てきたなと思いました。賈氏の映画は、今までの中国映画にはないリアリティがあります」と述べました。

賈氏は、「福岡アジア文化賞は私にとって大きなプレゼントです。私は1993年に北京電影学院に入学して日本の映画を知るようになり、黒澤明監督の『羅生門』や小津安二郎監督、大島渚監督の作品に出合いました」と喜びの声と日本とのつながりを話しました。続けて、「私

は中国の新しい社会とともに歩んできたと言えます。中国社会の変革の中で生き、大きな影響を受けています。中国の社会を描くことに興味があり、デビュー作から今まで絶えず中国の“今”を描いています。映画はその時代を記録する役割があり、どのような人が生きているのかを伝えていかなくてはならないと考えています。日本映画でいうと、小津監督の『一人息子』は日本の家庭状況を描いていると思います。中国では16〜20歳くらいの若者が映画を観る層だと言われています。映画は娯楽的になりつつありますが、時代・社会を映す鏡であるべきだと思います」と語りました。

次に、パネリストによる「マイベスト賈樟柯作品」を紹介。行定氏は『青の稲妻』を選び、その理由を「青春映画の傑作だと思います。登場人物たちの、抗おうとするけど抜け出せず、全く未来が見えない姿が印象的です。映画の中の『30歳まで生きれば十分だろう』というセリフにリアリティを感じました。何にも似ていない映画です」と述べました。市山氏は『プラットホーム』を挙げ、「賈監督と最初に仕事をした映画です。映画を撮るプロセスも素晴らしいのですが、なかなか撮影が終わらなかったことを覚えています」と撮影秘話を交えて紹介しました。

最後に賈氏から、中国で封切となった新作映画『アッシュ・イズ・ピュアレスト・ホワイト（英題）』の紹介があり、新作の日本公開に期待を寄せつつ市民フォーラムは幕を閉じました。

学校訪問

■ 実施日／9月21日（金）10:40〜12:10
■ 会場／九州産業大学

賈氏は、今回が日本の大学で初めての講演。学生で埋め尽くされた教室で、自身の学生時代のエピソードを披露しました。

賈氏は幼い頃に友人の死などに直面し、さまざまな出来事を物語として語らなくてはならないと思い、高校時代は執筆に没頭していたと当時を振り返りました。高校卒業後は絵の学校に通い、昼間は絵を、夜は小説を書いていましたが、どちらも「時間の流れ」を表現できないと感じていたそうです。そんなときに、陳凱歌（チェン・カイコー）監督の映画『黄色い大地』に出合い、映画こそ自分がやるべきことだと思ったと語りました。北京電影学院入学後は、仲間とインディペンデント映画『小山の帰郷』を制作。賈氏は「映画監督の役割は、世界で起こっている物事を伝えるための郵便配達のようなものです。バーチャルなものに囚われて、目の前にあるリアルなものを見失うのではなく、実体のあるものから経験を積んで豊かになってほしいと思います」と学生にメッセージを贈りました。

学術研究賞

末廣 昭

日本／経済学、地域研究（タイ）　*SUEHIRO Akira*

市民フォーラム

私のアジア経済論40年
キャッチアップ型工業化論からデジタル経済論へ

■ 開催日／2018年9月22日（土）　11:00〜13:00　■ 参加者／150人
■ 会場／福岡市科学館6階 サイエンスホール

第1部 基調講演

タイを越えたアジア全体に視野を広げ4つの段階でアジア経済論を展開

私は大学入学前からアジア研究をやりたいと思っていて、1972年にタイで起こった日本商品不買運動などをきっかけに、タイを研究テーマにしようと考えました。ですが、1997年のアジア通貨危機がターニングポイントとなり、タイだけを見ていたらアジアのことが分からないと痛感して、以後積極的にアジアの問題に視野を広げるようになりました。私のアジア経済論は、ドイツのインダストリー論にならい、1.0から4.0の4つの段階に分けて展開しています。

まず、「アジア経済論1.0」は、人口爆発の問題から入ります。人口が増加することにより、経済成長が低くなり、アジアは低開発であるとされてきました。

次に、私が最も力を注いでいる「アジア経済論2.0」について。後発国がとる工業化として、日本の経験が一つのヒントになっていると考えました。経済的後進性の優位、つまり、遅れて工業化を始めた国は、先発の国よりもいくつかの点で有利な点があります。例えばすでに開発された技術を導入して、それを利用することができます。ですが、後発性の利益を発揮するためには条件が必要で、数ある後発国の中でなぜ東アジアだけが発展を遂げたかというと、①政府レベル　②企業家レベル　③生産現場レベルで工業化のための社会的能力の形成が実現したということが挙げられます。

「アジア経済論3.0」では2.0の見直しを行いました。アーキテクチャ論のオープン化とモジュラー化が進むことによって、電子産業の場合は後発国の企業が先進国を越えることも可能になったのです。ここで強調しておきたいことは、これを実現しているのは「国」ではなく「企業レベル」のキャッチアップであるということです。単位が国から企業に移ったことに注目していただきたいと思います。

最後に、「アジア経済論4.0」について、実は私も今何が起きているのか十分わかりません。私がやってきたアジア経済論とは違うものが起き始めていると考えています。

第2部 パネルディスカッション

パネリスト **大泉 啓一郎**
（株式会社日本総合研究所
調査部上席主任研究員）

コーディネーター **清水 一史**
（九州大学大学院経済学研究院教授）

デジタル化が加速する中で国家をどのように捉えればいいのか

大泉氏の「デジタル経済における国家の役割は」の問いに、末廣氏は「日本経済論をベースに考えると、制度・教育などの環境を整備した点では、国家は日本の産業発展に大きな役割を果たと言える。しかし、産業発展は民間企業の努力、というのが共通の認識。日本には技術革新の特徴としてイノベーションを支える国家的枠組みがあり政府が一定程度貢献するが、国家の介入をどこまで許すのかは関わり方が変わってくる。また、メガ企業とマイナー企業に対して同じサポートを行うと反発が起き政府としての公平さを失うことに。つまり従来型の国のサポートは、直接であれ間接であれ難しいのではないかと考える。」と述べました。

ディスカッション終了後も末廣氏の考え方に高い興味を持つ多くの市民が、同氏へ熱心に質問するなど大変活発な時間となりました。

学校訪問

■ 実施日／9月21日（金）11:00〜12:20
■ 会場／福岡女子高等学校

講演は「私と地域研究　ジェンダーの観点から」をテーマに、アジア経済研究の歩みや女性の社会進出などについて、スライドを用いながら行われました。カースト制度や女性の社会進出についての変遷や問題だけでなく、それらの研究に多くの女性研究者が活躍し、現地で粘り強く時間をかけ、緻密な調査が行われていることも語られました。

続いての質疑応答では「どんな高校時代だったか」との問いに、当時は塾がなかったこともあり、特別熱心な受験生でなかったと回答。また海外での印象的な経験については、タイの路上生活者が屋台で自分が食べているものよりも良いものを食べているのを見て、彼らの逞しさや、文化の違いを感じたことなど、ご自身のエピソードを交えて語っていただきました。

その後、生徒から花束が贈呈され、生徒代表が「講演を通して物事の考え方や生き方について見直すことができ、今、頑張っていることに一生懸命取り組みたいと思いました」と挨拶しました。

ティージャン・バーイー

インド／音楽　*Teejan Bai*

市民フォーラム

パンダワーニーの世界
インド古代叙事詩の歌語り

■ 開催日／2018年9月22日(土)　16:00～18:00　■ 参加者／250人
■ 会場／福岡市科学館6階 サイエンスホール

第1部 講演

インドの大叙事詩を歌語りで披露し 地域を越えて人々の心を引き付ける

村山氏は講演で、パンダワーニーとは、インドの叙事詩『マハーバーラタ』の名場面を「歌語り」でパフォーマンスするもので、インド・チャッティースガル州を中心にその周辺で行われ、パフォーマンスはヒンディー語の方言であるチャッティースガリー語で語られることを解説。それは、民衆芸能として伝えられ、日本で例えると浪花節のようなものであると述べました。ティージャン・バーイー氏が持つ楽器「タムラー」は3本の弦からなり、楽器の中に3人の神様がいると紹介。また、楽器であると同時にさまざまな見立てに使われ、弓やこん棒、もぎとられる腕などの役割を果たすとのこと。宗教的儀礼とは関係なく、自由にどこででも公演できると話しました。

続いて、沖田氏が『マハーバーラタ』は全18巻、約10万詩節からなる世界でも最大級の大叙事詩であると紹介。『マハーバーラタ』の主題は、バラタ族の王位継承問題に端を発した大戦争であり、主役はパーンドゥ王の五人の王子と、彼らの従兄弟にあたる百人の王子。これらの英雄たちは、「化身」と呼ばれるインド特有の関係によって、天上における「本体」ともいうべき神的存在と結び付けられ、神と英雄たちとの関係が物語に大きく影響していると話しました。『マハーバーラタ』は決してハッピーエンドの英雄物語ではなく、戦争に加わったほとんどの戦士が死に、神の子である主役の英雄たちも人間としての罪と死を逃れることはできないという、きわめて深淵な神話であると講演を結びました。

講演者
村山 和之
（中央大学および
和光大学非常勤講師）

講演者
沖田 瑞穂
（日本女子大学家政学部
および白百合女子大学
非常勤講師、
中央大学文学部兼任講師）

コーディネーター
小磯 千尋
（金沢星稜大学
教養教育学部准教授）

第2部 パフォーマンス

演目：『ドラウパディーの花婿選び』
　　『ドゥシャーサナの殺戮』
出演：ティージャン・バーイー／パンダワーニー奏者
　　ケーヴァル・プラサード／タブラー（太鼓）
　　マンハーラン・サルヴァ／ダフリー（タンバリン）
　　ラームチャンド・ニシャード／ボーカル、マンジーラー（シンバル）
　　チャイトラーム・サフー／ハルモニウム（オルガンの一種）
　　ナロッタム・ネータム／ドーラク（両面太鼓）

第2部はティージャン・バーイー氏によるパンダワーニーのパフォーマンスが行われました。タムラーという三味線のような弦楽器を手に、絞り出すような声で歌い上げる姿は、まるで登場人物が憑依したかのようで、観客の心を強く引き付けました。『ドラウパディーの花婿選び』では弓矢を手に取り、油の入った水槽の魚影から魚の目を射抜くというシーンが最大の見せ場でした。ティージャン・バーイー氏の得意演目であるという『ドゥシャーサナの殺戮』では、髪にドゥシャーサナの血を塗りつけて結わえるシーンを熱演。また、伴奏者とかわすやり取りも面白く、一瞬たりとも目が離せないパフォーマンスが披露されました。

学校訪問

■ 実施日／9月21日(金)10:35～11:25
■ 会場／堤ヶ丘小学校

パンダワーニー伴奏者によるリズミカルな音楽で幕を開けた音楽交流会。まず、案内役の村山和之氏がパンダワーニーとティージャン・バーイー氏を紹介し披露される物語を解説。「マハーバーラタ」の物語を歌うパンダワーニーのパフォーマンスが始まりました。当初、児童たちは力強い歌声に圧倒された様子でしたが、次第にティージャン・バーイー氏の表情豊かな演技に引き込まれていき熱心にステージを見つめていました。

演奏後は児童たちが返礼として校歌を合唱。質問コーナーに移ると、楽器の特徴やマハーバーラタが作られた時代、パンダワーニーとの出合いについて児童たちは活発に尋ね、ティージャン・バーイー氏は一つ一つに丁寧に答えていました。締めくくりに「私は辛いことがあっても乗り越えて大好きなパンダワーニーを続けてきました。みなさんも自分の国の文化を大切に自分でやろうと思ったことはやり遂げましょう」とメッセージ。児童たちは盛んに拍手を送っていました。

■ 実施日／9月21日(金)14:25～16:15
■ 会場／和白中学校

全校生徒から大きな拍手とヒンディー語による歓迎の言葉で迎えられたティージャン・バーイー氏一行。最初に村山氏がティージャン・バーイー氏と「マハーバーラタ」を紹介しステージはスタート。演奏は次第に熱を帯び、生徒たちは感動の眼差しで動きを見つめ歌声に聞き入っていました。

返礼として生徒たちは「ふるさと」を合唱。その後の質問コーナーで生徒代表が、パンダワーニーを女性が演じることの苦労を尋ねると、ティージャン・バーイー氏は「当時は批判が強く、家族にも理解してもらえませんでした。しかし、パンダワーニーを愛していたので乗り越えることができ、今は幸せ」と答え、「希望や夢に向かってやりたいことをやり抜いてください」とメッセージを送りました。それに対し生徒代表がお礼の言葉と共に花束と校歌が入ったCDを贈呈。ティージャン・バーイー氏は笑顔で受け取り、全校生徒に手を振って感謝の意を表していました。

受賞者記者会見および広報活動など

受賞者記者会見

授賞式に先立ち行われた記者会見では、国内外から記者を招き、受賞者の紹介や質疑応答を英語で行いました。

冒頭では、髙島宗一郎福岡市長が映像を使って福岡市を紹介するプレゼンテーションを披露。近年人口が増加している福岡市は、都心と自然が融合するコンパクトシティであることを伝えるとともに、史跡や博多祇園山笠などの伝統文化、豊かな食文化が根付く魅力的な街であると紹介しました。

続く受賞者紹介で、賈樟柯氏は「今回の受賞は、映画制作に対する励ましです」と語り、ティージャン・バーイー氏は「海外での受賞は初めてで、昨夜は興奮で眠れなかった」と喜びの声を上げました。

その後、記念撮影が行われ、質疑応答へ。高校生記者からの「日本の高校生にどのような印象を持っていますか？」という質問に、賈樟柯氏は「映画の中で見ただけですが、中国と日本の高校生ではかなり印象が異なります。どの国の高校生にも伝えたいのですが、若いときに世界に目を向け、視野を広げることが大事です」とアドバイスを贈りました。密度の濃い質疑応答が活発に行われたのち、記者会見は幕を閉じました。

【受賞者記者会見】
◆日　時：2018年9月20日(木)
　　10:00～11:00
◆会　場：グランドハイアット福岡
　　サボイⅠ・Ⅱ

髙島市長によるプレゼンテーション、福岡市の魅力をPR

受賞者紹介

海外記者からの質問

高校生記者からの質問

質問に答える受賞者

海外メディア向けプレスツアー

海外メディア向けプレスツアーでは、受賞者の出身国である中国やインドをはじめ、国内外からアジアの記者が福岡を訪れ、福岡アジア文化賞や福岡の魅力を広く取材、発信しました。

◆取材メディア：3か国5名
・Jie Mian（中国）
・Beijing Mtime Network Technology Co., Ltd（中国）
・The Hindu（インド）
・IPS, Inc.（フィリピン）
・D&D Press Japan（フィリピン）

◆日　時：2018年9月20日(木)～9月22日(土)
◆取材先：授賞式、市民フォーラム、学校訪問、宗像大社　ほか

Fukuoka Prize 2018
Winners Awarded

報道記事

報道実績

【報道件数】国内：29件　海外：171件　計：200件　（2018年12月現在）

共催事業　福岡アジア文化賞大賞受賞記念「ジャ・ジャンクー監督特集」

現代中国を代表するジャ・ジャンクー監督の初期の代表作を上映

賈樟柯（ジャ・ジャンクー）氏の大賞受賞を記念して、監督の初期の作品である『プラットホーム』と『青の稲妻』の2作品を1日1回ずつ2日間上映しました。

詳細

- 日　時：2018年9月1日（土）
  11：00/14：30
  2018年9月2日（日）
  11：00/14：00
- 会　場：福岡市総合図書館
- 共　催：福岡市総合図書館
  映像ホール・シネラ
  実行委員会
- 参加者：487名

プラットホーム

©Bandai Visual, Bitters End, Office Kitano

青の稲妻

©Bandai Visual, Bitters End, Office Kitano

歴代受賞者関連事業

共催事業　福岡アジア文化賞歴代受賞者および ラモン・マグサイサイ賞受賞者による講演会

アン・チュリアン氏（2011年福岡アジア文化賞大賞受賞者）と石澤　良昭氏（2017年ラモン・マグサイサイ賞受賞者）による講演と対談。

詳細

- 日　時：2018年3月3日（土）
  13：00～15：00
- 会　場：福岡市役所本庁舎 15階講堂
- 共　催：国際交流基金アジアセンター
- 参加者：150名
- 講　演：「民族栄光の象徴アンコール・ワット ー文化遺産に込められた精神的支柱ー」石澤良昭氏
  「死者の神、生者の神　ーカンボジア宗教史における神"ヤマ（閻魔）"信仰と儀式ー」
  アン・チュリアン氏
- 対　談：「福岡アジア文化賞の価値」

アン・チュリアン氏

石澤良昭氏

協力事業　福岡ユネスコ・アジア文化講演会「アオザイ～その伝統的価値と現代生活への影響力」

ミン・ハン氏（2015年福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者）による講演とファッションショー。

詳細

- 日　時：2018年11月8日（木）
  19：00～21：00
- 会　場：電気ビル共創館3階
  カンファレンス大会議室
- 主　催：（一財）福岡ユネスコ協会
- 共　催：福岡市教育委員会
- 参加者：70名

福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990 - 2017

第1回 1990

創設特別賞
巴 金
BA Jin
（中国／作家）●

『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞
黒澤 明
KUROSAWA Akira
（日本／映画監督）●

「羅生門」はじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞
ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
（英国／中国科学史研究者）●

中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞
ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
（タイ／作家・政治家）●

大河小説「王朝年代記」ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞
矢野 暢
YANO Toru
（日本／社会科学者）●

日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大　賞
ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
（インド／音楽家・シタール奏者）●

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞
タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
（インドネシア／歴史学者・社会科学者）

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会科学者。

学術研究賞
中根 千枝
NAKANE Chie
（日本／社会人類学者）

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、「タテ社会論」等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞
ドナルド・キーン
Donald KEENE
（米国／日本文学・文化研究者）

大著「日本文学史」はじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 1992

大　賞
金 元 龍
KIM Won-yong
（韓国／考古学者）●

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞
クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
（米国／文化人類学者）●

インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞
竹内 實
TAKEUCHI Minoru
（日本／中国研究者）●

社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
（フィリピン／建築家）●

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大　賞
費 孝 通
FEI Xiaotong
（中国／社会学・人類学者）●

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞
ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
（マレーシア／経済学者）

マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞
川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
（日本／民族地理学者）●

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞
ナムジリン・ノロゥバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
（モンゴル／声楽家）●

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

●は故人

第5回 1994

大賞
スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
（タイ／考古学・美術史学者）●

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的位置づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞
王 賡 武
WANG Gungwu
（オーストラリア／歴史学者）

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞
石井 米雄
ISHII Yoneo
（日本／東南アジア研究者）●

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞
パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
（インド／舞踊家）

インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回 1995

大賞
クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
（インドネシア／文化人類学者）●

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞
韓 基 彦
HAHN Ki-un
（韓国／教育学者）●

独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞
辛島 昇
KARASHIMA Noboru
（日本／歴史学者）●

刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞
ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
（米国／ビデオ・アーティスト）●

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回 1996

大賞
王 仲 殊
WANG Zhongshu
（中国／考古学者）●

古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞
ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
（ベトナム／歴史学者）●

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞
衞藤 瀋吉
ETO Shinkichi
（日本／国際関係研究者）●

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞
ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
（パキスタン／カッワーリー歌手）●

イスラーム宗教歌謡カッワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回 1997

大賞
チェン・ポン
CHHENG Phon
（カンボジア／劇作家・芸術家）●

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞
ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
（インド／歴史学者）

独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞
樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu
（日本／考古学者）●

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞
林 権 澤
IM Kwon-taek
（韓国／映画監督）

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第9回 1998

大賞
李 基 文
LEE Ki-Moon
（韓国／言語学者）

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞
スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
（米国／人類学者）●

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞
上田 正昭
UEDA Masaaki
（日本／歴史学者）●

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞
R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono
（インドネシア／舞踊家・舞踊研究者）

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第10回 1999

大賞
侯 孝 賢
HOU Hsiaohsien
（台湾／映画監督）

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞
大林 太良
OBAYASHI Taryo
（日本／民族学者）●

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞
ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
（タイ／歴史学者）

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞
タン・ダウ
TANG Da Wu
（シンガポール／ヴィジュアルアーティスト）

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

●は故人

第11回 2000

大賞
プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
（インドネシア／作家）●

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞
タン・トゥン
Than Tun
（ミャンマー／歴史学者）●

厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー（ビルマ）史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞
ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
（アイルランド／政治学者）●

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞
ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
（マレーシア／影絵人形遣い）●

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン（影絵人形遣い）。

第12回 2001

大賞
ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
（バングラデシュ／経済学者）

「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞
速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro
（日本／経済学者）●

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞
タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
（タイ／画家）●

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞
マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
（フィリピン／映画監督）●

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第13回 2002

大賞
張 芸 謀
ZHANG Yimou
（中国／映画監督）

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞
キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
（スリランカ／歴史学者）

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞
アンソニー・リード
Anthony REID
（オーストラリア／歴史学者）

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞
ラット
Lat
（マレーシア／マンガ家）

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間 守善
HOKAMA Shuzen
（日本／沖縄学者）●

「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
（フィリピン／歴史学者）

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐 冰
XU Bing
（中国／アーティスト）

独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
Dick LEE
（シンガポール／シンガーソングライター）

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
（インド／サロード奏者）

インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲 以 寧
LI Yining
（中国／経済学者）

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
（ネパール／民俗文化研究者）

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルワ
Roland SILVA
（スリランカ／文化遺産保存建築家）

イコモス（国際記念物遺跡会議）委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第16回 2005

大賞
任 東 権
IM Dong-kwon
（韓国／民俗学者）●

韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウン
Thaw Kaung
（ミャンマー／図書館学者）

貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文献保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
（ラオス／織物研究家）

ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究家。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
Tashi Norbu
（ブータン／伝統音楽家）

ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

●は故人

第17回 2006

大賞
莫 言
MO Yan
（中国／作家）

現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル賞受賞。

学術研究賞
シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA
（モンゴル／歴史学者）

世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下 武志
HAMASHITA Takeshi
（日本／歴史学者）

アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI
（パキスタン／民俗文化保存専門家）

「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第18回 2007

大賞
アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
（インド／社会・文明評論家）

臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサック・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
（タイ／人類学・考古学者）

関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱 銘
JU Ming
（台湾／彫刻家）

深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金 德 洙
KIM Duk-soo
（韓国／伝統芸能家）

「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
Ann HUI
（香港／映画監督）

幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
（スリランカ／法学者）

南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
（マレーシア／社会人類学者）

民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
（バングラデシュ／音楽家）

バングラデシュの伝統的な宗教歌謡バウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
（フランス／文化地理学者）

欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
（インド／政治学・歴史学者）

正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞
三木 稔
MIKI Minoru
（日本／作曲家）●

邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
蔡 國 強
CAI Guoqiang
（中国／現代美術家）

北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第21回 2010

大賞
黄 秉 冀
HWANG Byung-ki
（韓国／音楽家）●

韓国の伝統的楽器「伽倻琴（カヤグム）」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞
ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
（米国／政治学者・人類学者）

東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞
毛里 和子
MORI Kazuko
（日本／現代中国研究者）

アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
オン・ケンセン
ONG Keng Sen
（シンガポール／舞台芸術家）

現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第22回 2011

大賞
アン・チュリアン
ANG Choulean
（カンボジア／民族学者・クメール研究者）

「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつくったカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞
趙 東 一
CHO Dong-il
（韓国／文学者）

主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞
ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
（ドイツ／建築史家・修復建築家）

南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

●は故人

第23回 2012

大賞
ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
（インド／環境哲学者）

開発やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞
チャーンウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
（タイ／歴史学者）

アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik
（フィリピン／映画作家・アーティスト・文化観察者）

途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
（インドネシア／宮廷舞踊家）

幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第24回 2013

大賞
中村 哲
NAKAMURA Tetsu
（日本／医師）

パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞
テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
（オーストラリア／アジア地域研究者）

民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞
ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
（インド／アーティスト）

映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞
アピチャッポン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
（タイ／映画作家・アーティスト）

民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第25回 2014

大賞
エズラ・F・ヴォーゲル
Ezra F. VOGEL
（米国／社会学者）

戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業経済地域（NIEs）の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞
アジュマルディ・アズラ
Azyumardi AZRA
（インドネシア／歴史学者）

イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多元的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

芸術・文化賞
ダニー・ユン
Danny YUNG
（香港／文化クリエイター）

多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第26回 2015

大賞
タン・ミン・ウー
Thant Myint-U
（ミャンマー／歴史学者）

グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞
ラーマチャンドラ・グハ
Ramachandra GUHA
（インド／歴史学者・社会学者）

民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞
ミン・ハン
Minh Hanh
（ベトナム／ファッションデザイナー）

ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

第27回 2016

大賞
A.R.ラフマーン
A. R. RAHMAN
（インド／ 作曲家・作詞家・歌手）

民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

学術研究賞
アンベス・R・オカンポ
Ambeth R. OCAMPO
（フィリピン／歴史学者）

著書やメディアを通した発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

芸術・文化賞
ヤスミーン・ラリ
Yasmeen LARI
（パキスタン／建築家・建築史家・人道支援活動家）

数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

第28回 2017

大賞
パースック・ポンパイチットおよびクリス・ベーカー
Pasuk PHONGPAICHIT & Chris BAKER
（タイ／経済学者）&（英国／歴史学者）

タイ社会が直面する問題を政治と経済、社会と文化など多面的に分析した共同研究は傑出しており、多大な社会貢献をしてきたタイの代表的知識人。

学術研究賞
王 名
WANG Ming
（中国／行政学者、NGO・市民社会研究者）

中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

芸術・文化賞
コン・ナイ
KONG Nay
（カンボジア／吟遊詩人、チャパイ・マスター）

内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャパイの弾き語りを現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

●は故人